



新潟大学を去るにあたって

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授

田村 詔生 TAMURA, Norio

平成8年に本学に赴任して以来、早くも13年経ち、美しい並木、春の桜と秋の紅葉に代表される自然豊かな環境と、諸先輩、同僚、若い人たちのおかげで、この度無事定年退職を迎えました。この機会に、お礼を申し上げます。

現在世界及び日本には、深刻な問題が山積していますが、このようなことは歴史的にしばしばあることで、夜の後には朝が来ると信じています。「朝」を迎える為に最も重要な要素は、特に天然資源が少ない日本にとって、また知的活動を主たる役割とする新潟大学にとっては、高い志を持つ「人」であると思います。しかし、高い志の実現には、易きに流れない心がけと努力が必要であります。特に若い人たちに、一言申し上げたいと思

います。総合大学である新潟大学で、広い範囲の多くの人々との交流の中で、多いに、見て、聞いて、読んで、会話して高い志を得、経験して、学んで、研究して、その実現を図って下さい。

つい先日アメリカには、オバマ大統領が誕生しました。また嬉しいことに、去年は4人の日本人がノーベル賞を受賞されました。これらの何れの方々にも共通することは、決して、自分の能力や情熱を注ぐ対象を、ある「自分の能力や環境による限界」を設定しその中に押し込めようとされなかったということだと思います。高志の国の新潟大学が志高い人の集団として、世の中に一層重きをなす様に発展することを、大学の外から御祈りしております。



新潟大学を退任するにあたっての思い

医歯学系(大学院医歯学総合研究科(医))

山本 正治 YAMAMOTO, Masaharu

学生として6年教員として41年、合わせて47年間新潟大学にお世話になりました。半世紀にわたる思いを一言で述べるとすれば「私をここまで育ててくれた新潟大学への感謝」です。昭和39年の新潟地震の中での解剖学骨学実習や、昭和43年のインターン制度廃止の為の卒業試験ボイコット運動等、どんなに大変な時にも教職員の方々は見守ってくれました。教員になってからも、農薬の環境汚染に関する私の研究で社会が騒然とする中、成り行きを見守ってくれました。いつも私の背中をそっと前に押してくれたのが新潟大学でした。

感謝の気持ちとしてアメリカ・ロシア・中国との医学生交流、チリ・ハンガリーとの国際共同研究等、あらゆる機会を捉えて新潟

大学のすばらしさを世界に向けて情報発信をしてきました。そのモットーは逆転の発想としてThink locally, act globally.でした。言い尽くせない私の思いは『どうなる日本の医学・医療ーグローバル化を体感した医学研究者の随想』(新潟日報事業社)としてまとめました。最後に「新潟大学は日本のトップ10、世界のトップ100をめざす」ことがアクションプランに明記されましたが、この目標達成の一方略として、教職員が一丸となり本学のすばらしさを世界に向け情報発信することを期待しています。



「ミネソタナイト in ニイガタ」(ミネソタ大学医学部長デボラ・パウエル(写真中央女性)一行が来日。歓迎会で万代太鼓の皆さんと記念撮影。2005年11月)

第57回 卒業制作展

●2009年2月3日~8日

●新潟県民会館3階アートギャラリーA

~ 57 t h S O T S U T E N ~

大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修の修了生と、教育人間科学部芸術環境創造課程造形表現コースと学校教育課程美術専修の卒業生による卒業制作展が開催されました。大学での経験を通じた自分の成長の証ともいえる作品の数々。訪れた方々は、その作品が語りかけるメッセージに耳を傾けるように鑑賞されていました。



view

眞島 圓 [洋画]

■制作意図

異常な人工物の集積とその中にあるもの。その表面上の光り、輝く眺めを描こうと思いました。

■苦労した点

画面のサイズに慣れるまで時間がかかりました。



憧憬

大橋 知世 [洋画]

■制作意図・及び作品のコンセプト・テーマについて

以前から人体の筋や肌の表情による形の力強さや美しさが好きでした。また、感情などを表現するような身体表現を見るうちに、人間の内面へと興味をもちました。そこで卒業制作では、人間の持つ性質を2つに分け、人体という題材を用いてある種の偶像のように表現してみたいと思い、この作品を制作しました。左の人物を理想的、理性的である個性の曖昧さの象徴として、右の人物を本能的、利己的、その醜悪さと愛しさの象徴のように描きました。二面性。それから他者と自分と。2体の人物の存在とその間の曖昧な距離を感じてもらえるような作品になれば、と思いながら制作しました。

■苦労した点

人体の形を描くにあたって、連なりや奥行きを表現するために筋肉や骨格など構造を調べました。また、コンセプトから一對の作品にしようと思っていたのでそれぞれの人体のポーズと画面への収め方には苦労しました。



とおくはなれてそばにいて

織田 侑那 [デザイン]

■テーマ

ひかりの呼吸

■制作意図

照度をとるための照明よりも、心の印象や物語を人に与えられる自由なあかりをつくりたいと思いました。光は人の感情が投影されるものだとは感じていて、この作品が人のキモチと空間をつなぐ導入口になればいいと思っていました。さらに、無機質な素材とは対称的に、有機的な形を用いることで生まれる作品自体の生命感と、照明が実現できるその場の居心地を追いかけました。



KA-SA —transportable umbrella—

渋谷 翔 [デザイン]

■制作意図

日常生活でちょっと面倒に思ってしまう行為を楽しむための道具の提案です。本体に買い物用のボード、専用のポリタンクやゴミ箱をつけることによって「運ぶ」という行為を楽しく行えます。

『Cu-gu』 —Let's make a secret base—

秋山 智仁 [彫塑]

■制作意図

前年度より継続した本学部附属幼稚園の環境整備プロジェクトの一環。

■コンセプト

組み替えの要素により遊びや学びを創出し、園児と教師の繋りの場をつくることを目的とした遊具型ツール。

■ポイント

組み替え可能なジャングルジム(Play cube)にごっこ遊びの出来る天板(Play board)を組み合わせることで無限の遊びをつくる。

■苦労した点

実際に幼稚園において使用するため特に安全性に重点を置いて制作した点。ものづくりの基本的な精神を見直すことが出来た。



SOTSUTEN interview

卒業制作展 インタビュー

加納いずみ

■会場を作る上で特に力を入れたこと、気をつけたことはありますか？

「会場全体としてはいらっしゃるお客様のことを考えたつくりをすることです。歩く道順や導線を考える時には、皆で何回も集まって会議したのも大変でした。あと作品同士がちょうどいい間隔になるようにするのも苦労しました。」

大桃ひと美

■どのような点に力を入れましたか？

「いかに自分の学んできたことを一つの形に表現するか、ということに特に意識しました。私は作品について考えることに時間を費やして、使いたい素材でどう表現していくか、コンセプトをどういう形でそこまでもっていくかということに頭を悩ませました。とにかく、自分の作品をどう見せたいか、どう形に残すかということを考えるのが苦しかったです」

高畑杏子

■作品を鑑賞する上でのポイントなどはありますか？

「触ったり体験できる作品はぜひ体験してもらいたい。見てもらうだけでも嬉しいんですけど、やっぱり体験して欲しいです。学生がいたら作品について聞いてみて欲しいです」

submerge

手塚 千晴 [彫塑]

■制作意図

題のsubmergeには『潜水する』という意味があります。丸太の樹皮の堅い部分から内部の柔らかい部分へ沈み込んでいく形。そこに自己のふかい部分にあるものへ問いかけるイメージを重ねました。

■苦労した点

木目や樹皮の質感、五体の関係性をどうしたら生かせるかという点で、設置に苦労しました。



芽吹く

伊元 志保 [彫塑]

■制作意図

非人間的で冷たい印象の鉄で、繊細さとしなやかさを表現しようと制作を始めました。

■コンセプト

私たちの世界を構築する絶対的な存在である鉄。そんな鉄に、柔らかな息吹を吹き込み、自然の生命力や躍動感を表現しました。

■苦労した点

勢いや緊張感を出すためにすべて点付けで溶接したこと。また違った表情を出すために、作品を形作る葉をひとつずつ叩いて曲げたこと。